

英語地名研究の方法論確立への試み

—セント・アイヴス (St. Ives) を中心に—

三輪 伸春

Place-name Studies in England

—A Historical Point of View—

Nobuharu MIWA

Abstract

This paper is an attempt to present a method in the study of place-names in England from the historical point of view.

In this paper I took up the place names, especially street names, of St. Ives in Cambridgeshire, most of which are particularly interesting when we investigate the origin and history of place-names of St. Ives and England. Historical incidents, political, economical, and cultural, are engraved in the place-names of St. Ives and England. The origin and history of place-names of St. Ives can be explained by both the history of England and that of the English language. The historical point of view in the study of place-names of England is deeply connected with the history of England and that of the English language.

キーワード：1. 地名, 2. 歴史的方法, 3. イングランド, 4. セント・アイヴス

Key Words：1. Place-names, 2. historical point of view, 3. England, 4. St. Ives

目次

- 第一章 story から history へ：地名研究を伝説から科学へ
- 第二章 ロンドンの「通り」をあらわすさまざまな語
- 第三章 英語史とイギリスの地名の多様性：征服と被征服の歴史
 - 1. ケルト語の地名 2. ラテン語の地名 3. 英語の地名
 - 4. 古北欧語の地名 5. フランス語の地名 6. 特殊な地名
- 第四章 歴史の証人＝セント・アイヴス (St. Ives) にみる「通り」の名称
- 第五章 結論：地名研究における歴史的原理確立への提言

第一章 story から history へ：地名研究を伝説から科学へ

本論は、英語本来語ばかりではなく、様々な外国語要素からなるイギリスの地名を英語史という視点から考え、その中に一貫する歴史的原理を設定することを目的とし、最終目標は、確たる方法論が欠如しているがために純粋な学術的研究とは評価されていない地名研究を「伝説 (legend)・お話 (story)」から「科学 (science)・歴史学 (history)」にするための方法論を探究することにある。

地名研究は、時に素人の趣味の域を出ず、話としては面白いが学術的研究には程遠いとみなされているようである。地名の研究は文献史料の精査とフィールドワークの成果により、個々の地名の語源を特定できても全体としての一般的な原理を見出すことが難しいからである。例えば、寺澤芳雄編『英語語源辞典』によれば、Londonの語源は「OE Lunden-, Lundeneで、ラテン語のLondiniumに由来し、さらにはケルト語（ブリトン語のLondinos）にさかのぼり、その意味はケルト語の‘wild, bold’であり、Thamesは「OE Temes(e)であり、ラテン語のTamesa, Tamesisあるいはケルト語（ブリトン語）のTamesāに由来し、意味は“dark river”である。しかし、これらふたつの語の語源を明らかにしても語源調査に首尾一貫した研究上の方法論、原理原則はない。

また、エイクヴァル (E. Ekwall) は『地名辞書』のIronbridgeの項で、

Sa, **Ironville** Db. Late names. Self-explanatory.

(*The Concise Oxford Dictionary of English Place-Names*, 1959⁴)

と記述している。エイクヴァルのこの記述態度は、「Ironbridge（およびIronville）という地名は近代になってから人為的に、意図的に生み出された地名である。従って、近・現代人の記憶に残っていない古い時代を研究対象とする「歴史学」の対象とはならない。また、その意味は自明であるから説明する必要はない。」ということを表わしている。エイクヴァルの考え方は、「歴史学」とは「現代人の知識からではうかがい知ることができない古い時代の事柄を、古文書、歴史的文献を解読することにより研究する学問である。」というものである。エイクヴァルの見解によれば、古期英語・中期英語という古い時代の事柄は研究対象になるが近・現代は現代人でも理解できるので研究の対象にはならない、ということになる。研究の視点・方法論よりもいかにして古い文献を発見し、いかにしてその意味を解読するかという点に関心がそそがれている。18世紀以降の英語は現代人の知識で理解できるので英語史の研究対象外であるという考えである。その意味では、地名の語源研究は、歴史文献をいかに解読するかを最重要課題とみなす伝統的な文献学 (philology) に地勢の実地調査 (field work) を加味したものと考えられてきた。古い写本の一部が何らかの事情により欠損している場合、できる限りほかの写本、異本といった文献を博捜して欠損部分を再建することに大きな意義を見出すという作業も文献学の一部といえるだろう。理論的研究が発達し、方法論が洗練されている現代の英語の音韻論、語形論、シンタックスからすると確たる方法論が欠如しているという印象がある¹。

本稿は、従来の地名の語源研究には方法論が不足していることを考慮し、語源研究になんらかの原理原則、方法論を探究する試みである。英語史の研究であれ、地名研究であれ、一定の

1 英語史研究において、方法論の理論的研究が進んでいるのは、音韻論、形態論、シンタックスであり、語彙論、意味論、辞書史論では英語史全体を通しての方法論が確立されていないといえる。従って、例えば「英語学文献解題」(研究社)の第3巻『英語史・歴史英語学』(1997)の第Ⅶ章「語彙論、意味論および語源学」の部分には特殊研究はあっても首尾一貫した方法論に基づく通史的研究は紹介されていない。筆者の『英語史への試み』(第Ⅲ部「英語の語彙—ドイツ語と比較して—」(1987)、『英語の語彙史』(1995)、『英語の辞書史と語彙史』(第Ⅱ部「英語の語彙史」, 2011)は、英語史における語彙史研究に方法論を探究したものであるが試論の域を出てない。

視点・方法論がなければ歴史的研究は文献・資料の泥沼におちいってしまうおそれがあるからである。もちろん、文献学的作業は本来方法論を必要としないという見方を否定するものではない。

まず、第二章では、具体的にロンドンに見出される多様な「通り」の意味する語 (*Street, Road, Mews, etc.*) を調査し、第三章では、なぜ英語には「通り」を意味する語が多様であり、特に、なぜ外来語が多いのかをイングランドの政治史、経済史、文化史と英語の歴史を考慮に入れながら考える。

第四章では、ハンティンドン州 (Huntingdonshire) のセント・アイブス (St. Ives) にみられる「通り」に付けられた名称の特徴をセント・アイブスの政治史、経済史、文化史などを幅広く考慮に入れることにより明らかにし、地名の語源研究におけるひとつの方法論を提言する。

第二章 ロンドンの「通り」をあらわすさまざまな語

—強迫観念というイギリスの「通り」の命名—

ロンドンに限らず、イングランドの通りには、どんなに細く短い道にも、袋小路にもかならず名称が与えられている。その徹底ぶりは「強迫観念」ともいえるほどである。しかもそれらの「通り」を意味する語は英語本来の語だけではとうてい足りないのでフランス語、ラテン語、イタリア語、北欧語といったさまざまな外国語要素からなっている。その具体的な例をロンドンを例にして挙げる (借用元言語は直近の言語)。

(A) 英語

- (1) Mews (「鷹かご」>「(館の背後の)^{うまや}厩」): (上流階級の趣味が「鷹狩り」から「馬」に推移した結果)

Gloucester Place Mews, Queen Anne Mews

- (2) Road (<(ride の名詞形)「(馬に乗って旅する) 道路」)

Uxbridge Road (アックスブリッジへ向かう道路), Edgware Road (エッジウエアに向かう道路)

- (3) Lane (「小路」)

Love Lane, Mark Lane

- (4) Row (「(列=) 家並み」)

Savile Row (高級紳士服街, 一説に「背広」の語源), Bunhill Row

- (5) Hill (「小山, 丘」)

Snow Hill, Ludgate Hill

- (6) Way

Bloomsbury Way, Warrick Way

- (7) Gate (英語, 北欧語「城門, 入口」)

Bishopsgate, Watergate, Moorgate, Queen Anne's Gate, Cambridge Gate

- (8) Walk

Broad Walk, Lancaster Walk, Lover's Walk, Dead man's Walk

(9) Buildings

Royal Exchange Buildings

(10) Wharf (<「波止場」)

Bull Wharf Lane, Kennet Wharf Lane

(11) Bank, Embankment (<en- + bank 「堤防」+ -ment):

Millbank, Victoria Embankment, Albert Embankment

(12) Grove (「小森, 神の森」)

Keats Grove, Ladbrokegrove

(B) ラテン語

(13) Street (<via “way”+ strata “paved” 「古代ローマ人が建設した軍用舗装道路」)

Watling Street, Oxford Street, Baker Street

(14) Circus (<circle 「円形広場」)

Oxford Circus, Piccadilly Circus

(15) Crescent (「三日月形」)

Park Crescent

(C) フランス語

(16) Place (「広場」)

Gloucester Place, Cumberland Place

(17) Gardens (jardin = 英語 yard)

Sussex Gardens, Elm Park Gardens

(18) Court, Yard (「塀に囲まれた中庭」)

White Lion Court, Johnson’s Court

(19) Square (「方形の広場」)

Russel Square, Bedford Square

(20) Close (<ラテン語「囲い地, 袋小路」; 英語の coal sack はフランス語 cul de sac “bottom of a sack” の通俗語源 (folk etymology))

Albion Close, Clarendon Close

(21) Terrace (<ラテン語「高台の町, 山の手」)

Cumberland Terrace, Chester Terrace, Hanover Terrace (cf. Mediterranean Sea 「地中海」= ヨーロッパとアフリカの中央にある海)

(21) Avenue (<ラテン語「道, 大通り」)

Shaftsbury Avenue, Northumberland Avenue

(22) Passage

Trinity Church Passage, Bulls Head Passage

(23) Alley (<ラテン語「家に入るための通路」)

Bear Alley, Passing Alley

(24) Market (<ラテン語「市場のある通り」)

Chapel Market, Hay Market

(25) Friars (<ラテン語「修道院」)

Blackfriars Lane, Austine Friars

(D) イタリア語

(26) Villas (<ラテン語「田舎の地主の邸宅」)

Chepstow Villas, Pembridge Villas

以上のように、ロンドンの「通り」を表わす語と地名は英語のみならず、さまざま外来語に由来する。ロンドンの「通り」を表わす語がさまざまな外国語からなりたっている理由を英語史との関係で考察する。

第三章 イギリスの地名の多様性の原因：征服と被征服の英語史

イングランドと英語の歴史は、一言でいえば「征服と被征服の歴史」である。イングランドには先史時代からさまざまな異民族が渡来し、アングロ・サクソン人自身も北ヨーロッパから渡来してきたゲルマン民族の一派である。渡来した異民族は友好的な場合もあり、敵対関係の場合もあったが、ともかくさまざまな異民族が外来語をもたらした英語の変化を促進させた。英語史を語彙に限ってみると、古期・中期英語期は、戦争、侵略、支配・被支配という政治的な事件による借用が顕著であり、近代期になると、ルネッサンスによる古典文化の復興、近代科学の著しい発展によりラテン語、ギリシャ語がもたらされ、大航海時代には海外進出により新世界から西洋の言語とは性格を異にする外来語が多数借用された。すなわち、古期英語・中期英語は征服と被征服という政治的な原因による借用、近代・現代は文化的な借用とはっきりとした傾向の違いが認められる。

英語史における外来語の一般的特質を念頭に、本稿の地名研究と外来語との関連で最低限必要な英語史の年表を記しておく。

表 1 英語史の区分

	英語史	年号	英語史に関連する主な事件	接触した民族	接触した言語
1	英語前史	55B.C.	ローマ軍ブリテン島に侵入	ケルト人	ケルト語
2	英語史の始まり	449年	アングロ・サクソン人の侵入	ケルト人	ケルト語
3	古英語	787年	北欧デン人人の侵攻 (北欧語の地名)	ヴァイキング (デン人)	北欧語
4	中英語	1066年 1362年	ノルマン・コンクエスト (フランス語の地名) (英語、公用語に復活)	ノルマン人 (デン人)	フランス語
5	近代英語	1500- 1650年	ルネッサンス		フランス語 →ラテン語
6			近代科学の発展		→ギリシア語
7			新世界への進出		新世界の言語

この年表にみられるようにイングランドへは各時代ごとにさまざまな異民族が渡来し、さまざまな外来語を英語にもたらした。本稿では、イングランドの地名という視点から英語史における外来語の歴史との関係を明らかにし英語の地名研究にひとつの方法論を提示する試みである。

第1節 ケルト語に由来する地名

多くが地名（河川名，山岳名，都市名），人名。

a 河川名：ウーズ(Ouse「水」)，トレント(Trent「よく氾濫する川」)，テムズ(Thames「黒ずんだ，広い川」)，アヴォン(Avon「川」)，セヴァーン(Severn「流れ?」)，ワイ(Wye「川」)

名詞 (=「川」，「水」)

afon (>英語 avon)：ストラットフォード・アポン・エイヴォン(Stratford-upon-Avon [ラテン語 Strat-英語 ford-英語 upon-ケルト語 Avon])

dwr (ダービシャーのダヴ(Dove)，ケントのドーヴァー(Dover)，チェシャーのディー(Dee))

uisge (wysg「流れ」，gwy，wy「水」)：ウェールズ Wysg 川>英語アスク(Usk)>ラテン語 Isca，デヴォンのエクス(Exe)，エクゼター(Exeter)，エクスマア(Exmoor)，エクスマウス，エクスマス(Exmouth)

形容詞

garw「波が荒い」。昔の英語では g はよく y と発音されたことからノーフォーク，ワイト島，デヴォンの Yare，ランカシャーのヤロー(Yarrow)

lleyn「波静かな」，linn「深く波静かな」，リン(Linn)「池のほとり」：キングスリン(King's Lynn)，ダブリン(Dublin)，リンカーン(Lincoln)

tam「幅の広い，黒い」：テムズ(Thames)，ティーム(Teme)，トーン(Tone)

cam「湾曲した」：グロスターシャー，ケンブリッジシャーのカム(Cam)

b 丘陵地の名前

pen「高地」：ペン(Pen)，ペンドル(Pendle)，ペンクレイグ(Pencraig)，ペンヒル(Penhill) (後半の要素(hill)は後にアングロ・サクソン人によって付加され，意味が二重)

tor「塔のように高い丘陵地」：デヴォンのヘイ・トール(Hey Tor)，ヘアー・トール(Hare Tor)

craig「岩」：ウェールズ；アイルランド (クリックレイド(Cricklade)，キャリック(Carrick))

第2節 ラテン語に由来する地名

道路，城塞（ローマ軍の特徴）：ハドリアヌス(P.A. Hadrianus)の長城(Hadrian's Wall)

「通り(street)」：チェスター・リ・ストリート(Chester-le-Street)，ストラットン(Stratton)，ストリットリ(Streatley)

Wall ハドリアヌスの長城沿い：ウォールエンド(Walls-end)，ヘドン-オン-ザ-ウォール(Heddon-on-the-Wal)，ウォルトン(Waltown)，ウォールヘッド(Wallhead)

-chester, -caster, -cester, -x (<ラテン語 castra = 「野営地」 Cf. camp: campus)

1. -chester ; (サクソン族が定住したエセックス (Essex < east-Saxon), サセックス (Sussex < south-Saxon), ウェセックス (Wessex < west-Saxon) 地域での形態) ; チェスター (Chester), コルチェスター (Colchester), ロチェスター (Rochester), ウィンチェスター (Winchester)
2. -caster (アングル族とデンマーク人が定住したノーフォーク (Norfolk), サフォーク (Suffolk) と中部地方 (Midland) 地域での語形)
カスター (Caster), ドンカスター (Doncaster), タドカスター (Tadcaster)
注 : ネン川 (ピーターバラの西) 中流の対岸にはっきりとわかる例がある。
(サクソン人の定住した北岸) : チェスタートン (Chesterton)
(デンマーク人の定住した南岸) : カスター (Castor)
4. -cester (サクソン人とアングル人とが融合して定住した中部のマーシア王国) : ce- の部分の発音を省略したスター (cester) : ビスター (Bicester [bɪstə]), ウスター (Worcester [wústə]), グロスター (Gloucester [glóstə])
5. -chester (北部のサクソン系) : チェスター (Chester), ランチェスター (Lanchester), リブチェスター (Ribchester)
6. -x (ウェールズとの境界近く) ch は x になる : エグゼター (Exeter < Excester), ロクゼター (Wroxeter), ユタクシター (アトクシター, アクシター)

第3節 英語本来語の地名

5世紀にアングル族 (主に中部地方), サクソン族 (おもに南部地方), ジュート族 (おもにケント地方) がイングランドに侵入。英語史が始まる。

ハム (-ham, 現代英語の home) : トッテナム (Tottenham), バッキンガム (Buckingham)

トン (-ton, 現代英語の town) : ミルトン (Milton), イートン (Eton)

接尾辞 -ing は父祖の名称。ウエストサセックスのヘイスティングス (Hastings) は 「Hæst(a) に従う一族」。レディング (Rēada (Reading)), Bc̅erl (エセックス, Barling), Rēada (< 'red' 「赤ひげ・赤毛の男」), Bc̅erl は軍団の長や族長。

動物の名前が wic (英語 「居住地, 農場」) と結合 : ノーサンブリアのビューイック (Bewick, "honey (bee) farm" 養蜂場), ゴズイック (Goswick, "goose farm" ガチョウの飼育場), ベリック (Berwick, "barley farm" 大麦の農場)

塩の産地に付けられた -wich : 塩は調味料, 肉類の保存用。製塩業が盛んになり wich が製塩所, 塩水湖。wich に関連するもっとも明らかな地名は 「塩が生産される場所」 ノーサンブリアのソルトウイック (Saltwick)

-ford 「浅瀬, 渡り場」 : オックスフォード (Oxford = 牛を渡らせる浅瀬), ミットフォード (Mitford), ウェセックスフォード (Wexford), ノルウェーの 「フィヨルド」 と同じ語源。

第4節 北欧ヴァイキング (=デーン人) による地名

9世紀を中心にヨーロッパ全土を震撼させたヴァイキング (Viking) はイングランドではデーン人 (Danes) と呼ばれ、その言語は古期ノルド語 (Old Norse) である。そしてデーン人が占拠したイングランド東部はデーンロー (Danelaw 「デーン人の法に従う地域」) と呼ばれた。

アングロサクソン人の住むイングランドとデーン人の支配するデーンローとの境界線は886年にウェセックスの王アルフレッド (Alfred) とヴァイキングの王グスラム (Guthrum) が協定し、ロンドンとチェスターを結ぶウォトリング街道 (Watling Street) のおおむね東側半分はデーンローとなり、西側半分がアングロ・サクソン人の支配領域となった。

デーンローを中心に残された古期ノルド語に由来する地名の例 (拙訳『英語史でわかるイギリスの地名』 pp.138-9)。

- 接尾辞-by: 境界線をなすウォトリング街道の東側に圧倒的に多い。-byは「農家(farmhouse), 村(village)」を意味する。Rugby, Grimsby, Darby
 thorp 「新たに開墾した土地」: Danthorp, Littlethorp, Burnham Thorp, Thorp Satchville(ヨークシャーには63例)
 gill 「狭い峡谷」: Hugill, Blagill, Garrigill
 brekka 「丘陵, 坂」: Warbrek, Breck, Scarisbrick

第5節 フランス語の地名

ノルマン人によるイギリス征服 (Norman Conquest, 1066年) は イギリス史上最大の事件である。イングランドにおけるデーンローとは別に、フランスのノルマンディ (<「ノルマン人の土地」) 地方に定住した北欧ヴァイキングの末裔ノルマンディ公ギョームは、イングランドのデーンローが消滅すると、イングランドは自分たちの先祖の領土であると主張してイングランドに侵攻し、征圧した。

ノルマン人はゲルマン語を捨て、文化面で優れたフランス語を母語に採用していたので、イングランドでも宮廷、領主、貴族といった上流階級の言語となり、フランス語 (のノルマン方言) が英語に大量に入り込んだ。ただし、地名はすでに確定した後の事件であり、ノルマン人は上流階級を形成し、大多数をなす庶民のアングロサクソン人の生活とは密着していないので地名への影響は甚だ少ない。

- beau (bel)- 「美しい」 形容詞: ダラムのビーミッシュ (Beamish), ノーサンブリアのボーフロント (Beaufront), レスターシャーのボーマナー (Beaumanor)

第6節 きわめて特殊な地名

バルドック (Baldock); ハートフォードシャーの荘園領主であったテンプレ騎士団 (Knights Templars) が命名。イラクのバクダッド (Bagdad) が語源。テンプレ騎士団は、1119年頃、イエルサレムへの巡礼者保護のために組織され、1312年頃に解散させられた宗教・軍事団体。

セント・アイヴス (St. Ives, ハンティンドンシャー); ペルシアからきた司教セント・イヴォ

(St. Ivo)に由来。

アイアンブリッジ(Ironbridge, セバーン川)；世界で初めてすべての部材が鉄でできた橋がこの町で建設されたことに基づく。

第四章 歴史の証人＝セント・アイヴス (St. Ives) にみる「通り」の名称

第1節 St. Ives という地名

エイクヴァルによると、イングランド内にはセント・アイヴス (St. Ives) という地名が3例のみある。

- (1) コーンウォール州の St. Ives はアイルランドの聖者 Saint Ia (>Sancti Ivonis) に由来する。
- (2) ドーセット州の St. Ives は「木づた, つる」(<“ivy”) に由来する。
- (3) ハンティンドンシャー (ケンブリッジの近く) の St. Ives はベルシアの司教 St. Ivo に由来するといわれ、中世イングランドの四大市場町のひとつであり、中世には繁栄を極めた。

このうち (3)ハンティンドンシャーの St. Ives が、地名研究における方法論の探究を試みる本論の主旨に重要な意味を持つ。

第2節 St. Ives (ハンティンドンシャー) の地名の特徴

ハンティンドンシャーの St. Ives の地名に見られる特徴は以下の3点である。

- (1) ロンドンと同じ「通り」の名前が多数ある。
- (2) St. Ives の町を南北に二分する Houton Road(地図の2A, 2B), St. Audrey Lane(2C) を境に、町の南半分と北半分とは地名の特徴にはっきりとした違いが認められる。
- (3) 英語の地名研究の方法論探究に有意義な地名がある。

以上の3点を詳述する。

- (1) ロンドンと同じ「通り」の名前が多数ある。

第2章(1)～(25)で述べたように、ロンドン、そしてイングランド全土に共通する「通り」の名前が多数ある。すなわち、地名という現象はイングランド全体に共通するので地名という現象からイギリスという国とアングロサクソン人の歴史、あるいは英語の歴史的性質をうかがい知る手段のひとつでありうる。

- (2) St. Ives の町を南北に二分する Houton Road(地図の2A, 2B), St. Audrey Lane(2C) を境に、町の南半分と北半分とは地名の特徴にはっきりとした違いが認められる。
すなわち、

南半分は古い街並みと伝統的・歴史的地名が顕著である。

Ramsey Road(3B), East Street(3C), King's Road(3C), Crown Street(3B), Market Hill(3C), Cromwell Terrace(3C), Wool Pack Lane(3B), King's Road(3C) など

これに反して、北半分は現代の新興造成地からなっており、いかにも意図的・作為的地名が目立つ。例。

- a) イギリスの著名な作家名：Chaucer Way, Shakespeare Road, Milton Close, Tennyson's Avenue, Dryden's Close, Burn's Way.(2B の丸で囲った区域)
- b) 画家の名前：Monet Close, Reynolds Close, Rubens Way, Lowry Close, Morland Way, Vandike Place.(1B, 1C の丸で囲った区域)
- c) 鳥の名前：Swan Close, Bittern Close, Teal Close, Heron Way, etc.(1B)
- d) アメリカ合衆国の州の名前：Virginia Way, Alabama Way, California Road, Michigan Road.(2A)
- e) 樹木の名前：Acacia Avenue, Elm Drive, Chestnut Road, Beech Drive, Oak Tree Close, Cedar Road.(2B)
- f) 貴族の爵：Windsor Close, Edinburgh Drive, Grafton Close, Manchester Close, etc.(1B, C)

これらの通りの名前は本来の地勢的語源とは全く無縁である。このことは、アングロサクソン人は歴史が始まって以来ありとあらゆる「通り」に名前を付けることを強迫観念のように実践してきたが、近代以降、歴史上かつてないほどに人口が著しく増え、町が拡大発展してあらゆる通りにその土地に関連しその土地に由来する（意味のある）語彙が限界に達して払底したことを表わしている。このことが、St. Ives の町の「通り」を表わす語彙は、古い歴史を持つ伝統的な南側半分と、現代になって全く新たに造成された新興住宅地とははっきりと分かれていることが観察される、という結果を招いたのである。このことはとりもなおさず、南側半分は歴史と伝統に基づく古い町であり、北側半分は歴史とは無縁の、全く新たに造成された新興住宅地であることを表わしている。

(3) 英語の地名研究の方法論探究に有意義な地名がある。

St. Ives に特徴的な古い地名

St. Ives には、第二章であげたロンドンの「通り」の名前(1)～(25)の他に St. Ives に特徴的な地名がある。St. Ives に特徴的な地名を語源別に分類してみると興味深い事実が認められる。すなわち、最初に、先史時代に St. Ives の町に定住したが文字による記録が残されていないためにその実態を知られていない先住民族が定住していたこと。次いで、ケルト人がウーズ川を遡ってこの町に定住し、海外との交流をも含めた交易の町、市場町として発展させた。次いでローマ軍がイングランドを支配し、現在も残る重要な都市などにラテン語の地名を残した²。その後、アングロサクソン人が渡来してイングランドの四大市場町³のひとつとしてますます繁栄した。アングロサクソン人の後には、北欧から侵略してきて定住したデーン人もウーズ川

を海外との物資の交易に利用し、交易を発展させてこの町を港町として、同時に市場町として繁栄させた。

先住民族、ケルト民族、ローマ軍、アングロサクソン人、デーン人が順次この町に住みついた歴史的証拠が地名に残されていることを証明する。

(a) St. Ives のもっとも古い地名 (番号はロンドンの(1)～(25)の続き)

(26) How, Houghton(「崖地」)：Rise(「坂道」)は先住民族に由来する地名

語形は英語になっているが語源のはっきりしない Houghton (2A, 2B)「崖地」は、文字による文献が残されていないので実態の知られていない先住民族からアングロサクソン人が「崖 (の上)」を意味する地名として口伝に受けついで語と考えられる。町を取り囲むように周辺部をめぐる道路のうち北西部 4 分の一を占める部分は Hill Rise (2B, 2A, 1A, 1B「(上りの)坂道」)である。また (地図の26) High Leys Green, High Leys Green, Green Leys (「台地」, (地図の26) Green How (Hough-と同じ語源), Little How, Meadow How (1B, 2B 下部)といった「崖地, 台地」を意味する地名から考えられることは、先住民族はウーズ川の川辺に集団生活を営んだ。ウーズ川は生活するために必須である飲み水と豊富な食料(川の魚, 植物, その果実)をもたらし, ウーズ川の水を求めてくる動物を獲物として期待できるからである。ただし, ウーズ川の洪水への対策の技術が未熟であったので水害を恐れて高台に住居を構えた。従って, 町の北西部の高台地域が St. Ives のなかでももっとも古い地名を残しもっとも古くからヒトが住み着いた場所である。このような安全な高台に住み, 食糧を川沿いの低地に求める構造は古代によく見られる生活様式である。

(b) ケルト語の地名

(27) ケルト語 (Quay Wellington Street, St. Ives Quay : ウーズ川沿い。New Bridge の東側たもと。3B と4C の境界線上, 地図上の番号27)

Quay は「波止場, 岸壁, 埠頭」を意味するケルト語に由来する。

中期英語 kei ←古フランス語 cai, kai ←ケルト語 ←印欧祖語*kagh-

(寺澤編『英語語源辞典』, 要約)

2 ローマ軍は見知らぬ土地であるイングランドを征服した際、先住民族であるケルト人たちが用いていた地名を借用して命名した場合が多くある。ケルト人(ブリトン人)たちにとっては普通名詞であった語を固有名詞として用いた場合もある。H. ブラッドリは次のように言う。

As a matter of fact names of Latin etymology are almost entirely absent from the lists of towns and stations given in Roman military documents.

What the Romans usually did, when they had to find a name for a station in a place that had no native appellations, was to take the British name of the adjacent river, and use it as a place-name.

(Bradley, 1928, p.9)

Many names of towns or villages, though of Anglo-Saxon formations, are derived from the British names of the rivers or books on which the places stand, as Cheltenham from the Chert, Charwelton, from the Cherwell.

(Bradley, 1928, p.101)

3 他の3つの市場町はスタウアーブリッジ (Stourbridge, ケンブリッジ), ウインザー (Windsor, ハンプシャー), バーンロミュウ (Bartholomew, ロンドン)。

ウーズ川の川岸に残された Quay という語は非常に古いケルト語に由来しており、歴史に記録を残した最初の民族であるケルト人がこの町を港町として、同時に初期の市場町として利用し始めたと考えられる。中世、ヨーロッパ各国から商人たちが交易品をこの港に積み荷を降ろし、セント・アイヴスは市場町として繁栄した。

(c) 古期英語に由来する地名：

(28) Slepe (Slepe Hall, Slepe Hall Playing Field, 3B)

(29) Ivo > Ives (St. Ivo School, 3B, St. Ivo Recreation Centre 3B, St. Ivo Golf Course, 2A)

Slepe は「坂 (の), 湿地 (の), 滑りやすい (ところ)」を意味する。英語の語源辞典 (Ekwall 編, 寺澤芳雄編) ではゲルマン語 (古期高地ドイツ語, 古ノルド語) までしか言及していないが, インド・ヨーロッパ諸言語における対応語を広範に取り上げているバックにはゴート語, サンスクリット語への言及がある⁴。

エイクヴァルによると slepe の語源は以下のようなものである。

OE *slap* It is related to OE *slipor* 'slipperly', OHG *sleifan* 'to glide', ON *sleipr* 'slippery', MLG, OHG *sleifen* 'to drug'. *Slap* is usually held to mean 'slipperly or miry place'. This suits some of the place names with names containing the element, as *ruislip*, *slepe*, the Old name of ST. IVES. Huntingdon. There was in OE *slap* 'mud, mire, mirsh'.

(Ekwall, E., *The Concise Oxford Dictionary of English Place-Names*, 1960, 下線筆者)

次に、関連する *slope* を寺澤芳雄編『英語語源辞典』から引用する。

Slope † adv. 《a1470》 - 《1820 Keats》斜めに, ◆ME *slope* (頭音消失) ← *aslop(e)* 'ASLOP(E)'. - adj. 《a1500》斜めの. ME *slop*, *slope* (adv.). (...)

(寺澤芳雄編『英語語源辞典』1996, 研究社)

古期英語の *slop*, *sloppy*, *sloping* や *slippy* 「つるつるの」, *slop*, *slope* 「泥だらけのところ」, *sloppy* 「泥んこの」, *aslope*, *aslop* 「斜面をなした」などとの関連も示唆してある。

バック (C. D. Buck) には, 古英語 (*slūpan*), 中期英語 (*slippe*), 古期高地ドイツ語 (*slīfan*), 近代英語 (*slip*), ゴート語 (*sliupan*), オランダ語 (*slippen*), サンスクリット語 (*sip-*) などとの関連が記されている。

この単語も先住民族からアングロサクソン人が受け継いだ語, あるいは印欧祖語からの非常に古い語と考えられる。意味は, イングランドなどに観察される地名の地勢的状况から「ウーズ川の川辺のぬかるんだ傾斜地, あるいは河川敷, 湿地帯」を指す。先住民族以来, アングロサクソン人, ケルト人がウーズ川を生活の場として暮らしてきた証拠とみなすことができる。

4 C. D. Buck, *A Dictionary of Selected Synonyms in the Principal Indo-European Languages*, 1949, rpt. 1988, p.686.

紀元1000年頃、農夫が当時 Slepe と呼ばれていたこの村の東部で人骨の納められた石棺をほりあてた。ラムジイ大修道院 (Ramsey Abbey) からきた修道士たちはこれをペルシアから布教にやってきて1400年頃 Slepe 村で亡くなった司教 Saint Ivo のものであるとしてラムジイ大修道院に持ち去り、石棺の発掘された場所には小修道院 (St. Ivo's Priory) が建てられた。1981年になって考古学者による小修道院の発掘調査が行われた。その結果、小修道院のある場所はローマ人の集落の跡と判明し、ラムジイ大修道院に祀られた石棺の中の人骨はローマ人の農場主のものであるとされた。その後、新しい小修道院が近隣のサクソン人の集落遺跡東方に建てられた。新旧ふたつの小修道院にはさまれるようにして Slepe の町が発展し Saint Ivo's Priory, St. Ivo's Priory にちなんで St. Ives と呼ばれるようになった。現在、Slepe は地名としては残されていないが、Slepe Hall, Slepe Hall Playing Field (地図上の番号28) にその記憶をとどめている。

(30) 北欧語 Waits Broadway (3B, 「湿った」, 地図上の番号24)

Waits は古ノルド語 *vátr* に由来し、海洋民族であり海賊として一般に知られているが広くヨーロッパ中で交易商人としても活躍したヴァイキングの一派であるデーン人も北欧から北海を超えて、ウーズ川を遡り渡来しこの地を利用し、生活したことがわかる。

第五章 結論：地名研究における歴史的原理確立への提言

文献資料とフィールドワークに限定されていた従来の地名研究に方法論を探究することが本稿の目的である。

地名にはその土地の長い歴史が刻まれている。しかし、言語学者など少数の人々を除けば、言語には共時的側面と通時的側面があり、今自分の用いている言語 (共時的側面) の発音・文法は長い歴史と伝統の上に成り立っている (通時的側面) と認識している人はほとんどいない。同じように、地名の語源に関心のある少数の人々を除いて、現代に生きる人々の多くは今自分が用いている地名の語源についてはほとんど知識もないし関心もない。また、発音と文法については特に最近理論的研究が顕著に進められているのに反し、地名研究には、文献史料の精査とフィールドワークは進められてきているが方法論への関心は高くない。

本稿は、St. Ives を対象にして地名研究に方法論を構築しようと試みたものである。St. Ives の通りを表わす語には、先史時代から現代に至るまでに St. Ives に定住したいろいろな民族の生活の記録が各時代ごとに刻み込まれている。St. Ives の地名は St. Ives という町がたどってきた歴史を生き生きと表現している。また、St. Ives の地名が教えてくれることは、イギリスの地名全体にもあてはめて考えることで可能である。すなわち、イングランドという島には先史以来アングロサクソン人を含めてさまざまな民族が渡来してきた。さまざまな民族による征服と被征服の歴史がイングランドの歴史そのものであるといっても過言ではない。英語の歴史もさまざまな異民族、さまざまな外国語の影響なしには考えられない。イングランドの地名研究もいろいろな民族との接触の歴史を視野に入れることで一層明らかにされる部分が多いと考えられる。地名研究に英語の歴史を有効的に援用することが重要であると考えられる。

精緻な理論に基づく方法論は小論では望むべくもないが、イングランドの地名研究に英語史的視点の導入は必要であり、有用であると考えられる。

*St. Ives に関しては、畏友である明治大学の加藤哲実教授に負うところが大きいことを記して感謝します。

参考文献

Buck, D., *A Dictionary of Selected Synonyms In the Principal Indo-European Languages*, The Univ. of Chicago Press, 1949, rpt. 1988.

Davis, S.T. and Levitt, J. *What's in a Name?*, RKP, 1970.

(三輪伸春・松元浩一・福元広二訳『英語史でわかるイギリスの地名』英光社、2005年)

Edington, S.B., *The Life and Miracles of St. Ivo*, The Friends of the Norris Museum. 1985.

Ekwall, E., *The Concise Oxford Dictionary of English Place-Names*, Clarendon Press, 1960.

Ekwall, E., *Street-Names of the City of London*, OUP, 1965.

Norris, H. E., *History of Saint Ives, Galliard*, 1889.

Saint Ives in Cambridgeshire, (Official Handbook)

Watts, V., *The Cambridge Dictionary of English Place Names*, CUP, 2004.

寺澤芳雄編『英語語源辞典』研究社、1997年。

渡辺和幸『ロンドン地名由来辞典』鷹書房弓プレス、1998年。